専修人文論集 114号
（2024）061-086

“Wear and Tear”——James Johnson における胃弱とモダニティ[1]

石　塚　久　郎*

イントロダクション——疲弊のモダニティ

「何度も何度も，繰り返されるショック（“repeated shocks”）」は「強靭な人々の精根（エネルギー）を消尽させ」「しなやかな力を麻痺させる」とヴィクトリア時代の詩人・批評家マシュー・アーノルドは初期の傑作詩「学者ジプシー」（“The Scholar Gypsy,” 1853）の中で詠う。（210）産業とテクノロジーが飛躍的に発展したイギリス19世紀中葉の「病的に忙しない」（“sick hurry”）「モダンな生活」の渦の中に飲み込まれ，「物憂い懐疑」に取りつかれた現代人の病理がここに見事に描かれている。（211–13）現代人の「頭脳は酷使され，心臓は麻痺状態」。そこにあるのは「病的な疲弊」（“sick fatigue”）である。（211）アーノルドはそれを「モダンな生活のこの奇妙な病」（“this strange disease of modern life”）と表現した。（213）19世紀後半に顕著になるモダニティの病理を1853年という早い時期に喝破したのは，さすがアーノルドの慧眼と言わざるを得ない。加えて，この詩は「疲弊」（fatigue）を病理・疾病を意味するものとして使用した恐らく最初期の例の一つであり，疲弊の歴史を考えるうえでも重要であるということを指摘しておきたい[2]。「学者ジプシー」は本論の最後に立ち返る。

多くの研究者が指摘するように，19世紀後半のヴィクトリア人は産業構

＊専修大学文学部教授

造の急変に伴う，モダンな生活様式の病理に意識的であった。（Bonea; Dickson）インフラ的には鉄道網とテレグラフが整備されたことで人と情報の移動が飛躍的に加速され，人はこぞってスピード感溢れる生活を経験する。貴族に代わって覇権を握りつつあった中産階級の知的労働者は，自由主義的競争社会が到来したことで，地位と富と生活の質の向上の階梯を必死になって登ろうとする。「病的な忙しなさ」の中「何に向かってもがいているのかも分からずにもがく」（211）ヴィクトリア時代の人々は彼らがかつて経験したこのない重圧なプレッシャーと心的ストレスに押しつぶされそうになっていく。過労（overwork）による疲労困憊で夜の安眠は妨げられ，羊を数えても眠れず，アルコールや睡眠薬（特にクロラール）に依存する者が増える。時間に追われ，明日の仕事に遅刻しないようにと目覚まし時計が導入されたのもこの頃である[3]。

この危険な状況を前に19世紀後半，医師，文人，ジャーナリストらがモダンな生活の病理と弊害を訴えるようになる。過労と疲弊への医学的・社会的不安や懸念がうなぎ上りにあがる[4]。医師のベンジャミン・リチャードソンの『モダンな生活の疾病』（*Diseases of Modern Life*, 1876）はその代表例と言っていいだろう。リチャードソンは現代人がモダンな生活を送る，あるいは強いられることで被る「心労と心的ストレス」（“Worry and Mental Strain”）から様々な疾病――心臓疾患，神経疾患，胃弱など――がもれなく生じることを説いた。とりわけ懸念されたのは，神経の疲弊，神経疾患である。現代文明に毒された現代人は，よくてアメリカの医師ジョージ・ビアードが提唱する神経衰弱になるか，悪ければ重い神経症を発症し狂気に陥り自死してしまうかだろう，という認識は同時代の人々に共有されていた。その証拠に，19世紀後半を代表する医師の一人クリフォード・オールバットは，「神経疾患とモダンな生活」と題する論文で，現代は「ストレスの世紀」であり激変する生活様式のせいで狂気や精神病が増加している，という世間一般に広まっている考えを（否定するためにだが）

取り上げている。（210–11）モダンな生活様式とは「鉄道の渦，連打される電報，仕事の奮闘」の中で感じる「強いプレッシャー生活」（214）であり，世間一般の人々はここに神経の擦り減りを見ている。神経の擦り減りへの医学的関心は，安静療法の提唱者であるアメリカの医師ウィア・ミッチェルの『摩耗（擦り減り），働き過ぎの人への提言』（*Wear and Tear, or Hints for the Overworked*, 1871）によく表れている。

ヴィクトリア時代後期はこのように，モダニティが疲弊の病理と一体となって析出された時代と言ってよいだろう。本論で主張したいのは，このようなモダニティと疲弊の病理の回路が，一般に思われているよりもずっと早く——具体的にはヴィクトリア女王が君臨する前，1820年代から30年前半——に実現されていたのではないか，それは神経ではなく「胃」を通して，神経症ではなく胃弱を介してなされたのではないか，萌芽的とはいえ，既にモダニティの条件がそこに出そろっていたのではないか，ということだ。かなり大胆なテーゼに聞こえるかもしれない。当時は「過労」（overwork）や「ストレス」という言葉も流通していなければ「疲弊」の医学化もなされていなかったのだから[5]。本論で題材として取り上げるのは当代の流行医であり「胃の医師」（gut doctors）の代表格の一人であるジェイムズ・ジョンソン（James Johnson, 1777–1845）である。ジェイムズ・ジョンソンは今では熱帯医学の先駆者としてのみ医学史家の記憶に留められており，彼の最重要な胃弱の研究はほぼ忘れ去られている[6]。というかジョンソンについての研究は皆無といっていい。その意味で本論はジェイムズ・ジョンソンの再評価をも射程に入れる。ジョンソンはモダニティの象徴となる過労や疲弊，ストレスやスピードといった用語が利用可能になる前に，別の仕方でその萌芽をとらえていた。鍵となるのは胃弱論で展開される“wear and tear”「摩耗・擦り減り」である。ジョンソンの胃弱論を通じて，前ヴィクトリア時代（1820～36年頃）において疲弊のモダニティの囁きを聞き取ること——これが本論で試される。そのため本論

ではまず第１節で新しい疾病として流行した「胃弱」とジョンソンの胃弱論の特質を概説し，第２節においてジョンソンの胃弱論を“wear and tear”という観点から疲弊のモダニティに繋げる。

ジェイムズ・ジョンソンの胃弱論について留意点を二つ述べておく。一つは，ジョンソンの胃弱論は胃弱を特化して論じた『胃腸の病的感受性に関する試論』（1827）だけではその全体像は掴めず，その前後の枠となるような著作を経由しなければならないこと，二つ目は，ジョンソンにあっては一般的に「胃弱」と呼ばれている疾病を示す名称が定まらないことだ。彼は「胃弱」（dyspepsia）という語を好んで使っておらず，場面や文脈によって言い方を変えている。しかし，いちいち区別するのは煩雑なので，本論では胃弱に統一する。

１．“NOVA PESTIS”――胃弱の流行とジョンソンの胃弱論

新しい疾病としての胃弱の流行

胃弱が流行すると聞いて，奇異な印象をもたれるかもしれない。胃弱（indigestion，dyspepsia）とは一般的に消化器官の不全による身体の生理的不調，つまり，胃痛，下痢，便秘，胸やけなどの日常的な症状を指すものと捉えれば，古代から現代に至るまで切れ目なく存在するものであって，特定の時代に流行るものではないからだ。しかし，確かにヴィクトリア時代は胃弱の大流行の時代だった[7]。胃弱（特に19世紀以前には使われなったラテン語由来の用語 dyspepsia）をタイトルにした専門の医学書，教養読者向け啓蒙書，大衆向けパンフレット等々が雨後の筍のように出版された。例えば内科医のハバーションは世紀中葉に「毎年毎年，胃に関する疾病の著作が出される」といってその胃病の書を始めている。（１）胃弱の医療書が次々と生み出されるということはそれだけ需要があった，つまり胃弱患者が絶えなかったということも意味する。先のオールバットも1884

年の時点でうんざりしたように，カルテの大分なスペースを毎年分捕っているのは他ならない胃弱（dyspepsia）だと嘆き，「胃弱の殉教者」（“Martyrs to dyspepsia”）が「どの町角にも見つけられる」と言っている。（３）

このようにヴィクトリア時代を通じて胃弱の流行は見られたが，胃弱論の最盛期は19世紀中葉であるというのがこれまでの見解だった。（Gibbs）しかし私はヴィクトリア時代が始まる前に既に一度，最盛期を迎えていたと考えている。ジョンソンの胃弱論が書かれた1820年代前後の時期，摂政時代と呼ばれる時期だ。摂政時代に胃弱に関する４人の重要な「胃の医師」を中心に胃弱の理論が確立した。その４人とはジョン・アバネシー，ウィルソン・フィリップ，J・A・パリス，そしてジェイムズ・ジョンソンである。（アバネシー医師については以前論じた。［Ishizuka “Bile”］）彼ら４人の名前は胃弱の同意語としてヴィクトリア時代の胃弱論に流れていく。摂政時代における胃弱の流行という事態が忘れられたように見えるのには理由がある。同時期に胃弱と関連した（ないしは混合された）消化器系の疾病，「胆汁症」（biliousness, bile）が大流行したからだ。（Ishizuka “Bile”）胆汁症あるいは肝臓病（liver disease）とも称されたこの病は，肝臓と胆汁を重視するという意味で病因論的には胃弱と違いを見せるが，現象的にはほぼ同じと言っていいもので，胆汁症の熱狂的流行の前に胃弱は少々影を潜めなければならなかったのだ。20年代後半，胆汁症の流行熱に陰りが見え始めたところで，胃弱がせり出してきた。胃弱の医学史にとっては重要な点だが，本論の議論とは離れるのでここでの詳述は避ける。摂政時代に胆汁症も巻き込んで胃弱論の確立と大衆化（流行）が起こったという点を言うに留める。

更に奇異に感じるかもしれないが，この流行病「胃弱」はこの時代に登場した新しい病である。というか，「胃弱」が独立とした疾病として流行するには，そもそもそれが胃痛などの二次的症状ではなく，本来的な一次的な疾病として医学的に分節化される必要がある。例えば，胃痛を感じた

とする。医師の診察で胃潰瘍という診断が下される。この場合，胃痛がある疾病を示唆する症状であり，胃潰瘍はその疾病（名）ということになる。腹痛，胃痛，下痢といった，特定の疾病に付随する二次的な症状はそれだけとっても，本来的な病とはならない。つまり診断の参照枠には入らなければ，医療や治療の研究対象にもならない[8]。

摂政時代からヴィクトリア時代を通じて胃弱がこれほど跋扈した要因に，症状（二次的）と疾病（本来的）との区別の他に，それがあらゆる慢性病の元凶として認識されたことがあげられる。胃弱は，あらゆる病に住み着きその根源にあるかのような存在であると想定されたのだ。例えば，読書などの頭脳活動による疲弊で目がぼやける，あるいは飛蚊症がひどくなるといった症状がでたとしよう。現代ではそれが胃や胃弱に由来するとは考えないが，当時の人々は確かにそう考えた。目の疾患ばかりではない，心臓疾患や喘息，結核，癌，片頭痛，不眠症，憂鬱病，狂気に至るまであらゆる病の根源に胃弱が存在すると考えられていた。（石塚）だから，18世紀の上流階級で「痛風診断」が他の疾病診断を押しのけたように，また，その下のファッショナブルな階層では「神経診断」が他の疾病診断を押しのけたように，19世紀では「胃弱診断」が横行したのだ[9]。

ジェイムズ・ジョンソンも胃弱が過去に知られていない，現代に新しく登場した疾病だとの認識を共有していた。「この新しい疫病（“NOVA PESTIS”）は我々の祖先には知られていないし，記録されることもめったになかった。」（*Economy* 89）17世紀の名医，「イングランドのヒポクラテス」と呼ばれたシデナムでさえ墓から蘇っても現代の病の半分も認識できないだろう。」（92）　ジョンソンにとってあらゆる疾病は「環境の産物」（“the creations of circumstances”［89］）であり，時代・社会が変われば疾病も変化するのは当然なのだ。だから，「胃弱は……比較的新しい疾病である」（“Dyspepsia…is a comparatively new disease”［90］）と言うのである。ではジョンソンにとって胃弱とはいかなる病であったのか？

暴飲暴食の病，胃の病からの離脱

「胃弱」「消化不良」と聞いて真っ先に思い浮かべるのは，暴飲暴食だろう。昨日の夜，カレーを食べ過ぎた，ワインを飲み過ぎた，だから今朝は胃が痛い，と。ジョンソンの「新しい疫病」たる「胃弱」はそれとは似て非なるものだ。ジョンソンは言う。「胃の病は［暴飲暴食などの］習慣によってもたらされると誰もが思うに違いない。だが，こうした症例は文明的な生活において大いに流行している胃弱と比べることはできない。というのも，現代では暴飲暴食（“intemperance”）はかなり抑えられているからだ。」（*Morbid* 63）（see also *Economy* 122）暴飲暴食や不摂生（intemperance）によって，例えば痛風などの疾患になるというのは古代ギリシアから18世紀に至るまでの医学の常套句だが，ジョンソンはこのテンプレートから離脱しようとする。ここで，何によって胃弱が生じるのかを見る前に，ジョンソンが胃の病（消化不良）からも距離を置こうとしている点に触れておこう。

ジョンソンは胃弱と呼ばれている新しい疾病を，胃痛や消化不良を明示する慣例的名称“indigestion”（以下「消化不良」とする）から切り離そうとする。ジョンソンが言うに，「消化不良」は最も使い古された用語であり，かつ最も誤った用語である。「消化不良」は変幻自在な現れ方をする胃弱の一つの特徴に過ぎないのだと。（*Morbid* 42）この点をジョンソンは強調する。ジョンソンにとって胃弱なる新病は「胃腸の神経の病的感受性（“morbid sensibility”）」によって引き起こされる複合的疾病ないしは病的状態であって，決して「消化不良」や「胃痛」と混合されてはならない。それどころか，「消化不良」は「胃弱」にとってほとんど価値がないか，全く問題とならない場合さえある。（“…the term “Indigestion” is merely a conventional one, which is meant to designate a complication in which indigestion forms at most but a part — a very small part — and sometimes no part at all.”［*Morbid* 54］）このようにジョンソンは胃弱を

限りなく「消化不良」から遠ざけ，胃弱は胃の病ではないという認識を極端にまで推し進める。結果，ジョンソンはある地点で，胃弱は「実体」でさえなく「ある一つの疾病」（“a single disease”）でもないとまで言う。（*Economy* 123）これは，本来的疾病として分節化された胃弱を否定する危険性も孕んでいる。彼にとって胃弱は胃腸の病的感受性からくる「病的体質ないしは素質」（“morbid Constitution or Disposition”［*Economy* 123］）であって，ある特定の疾病に限定されるものではない。前述したように胃弱は万病の元と想定されていた。ジョンソンは当時支配的だったアバネシーの胃弱病因論――局所的疾病は消化機能の不全から生じる体質的疾病に過ぎないとする説――を敷衍する形で，胃腸から遠く離れた部位に生じる様々な疾患（精神的なものも含め）は「変幻自在なプロメテウス的な病」たる「胃弱」が別様の形をまとったものだとする。（*Economy* 131）[10] ジョンソンにとって「胃弱」は胃の病ではない。では何の病か？

知的労働者，都市生活の病へ

疾病に対するジョンソンの基本的な考えに，病は「環境・社会の産物」だという見方がある。「現代の習俗や習慣」（“modern manner and habits”［*Economy* 94］）に応じて過去に存在した疾病でも形を変える。腹の病（消化不良）も「再編成」（ibid.）されなければならない。では，19世紀最初の四半世紀（摂政時代）のイギリス社会で何が変わったのか？　ジョンソンによれば，都市化にともなう知的労働者の飛躍的な拡大だ。

> When the human species began to congregate in cities, it was soon perceived that in this close of society, the exertion of the *intellect* must predominate over that of the *body*. As civilization advanced, intellectual labour became more necessary, and the labourers multiplied in proportion. At the present period, the employment of a very large class of human beings, especially in civic life, consists almost exclusively

in *mental* exertion. … In all these *mental* labour is the *regular duty*, and corporeal exertion only the *occasional relaxation*. Nay, in the vast body of mechanics and artists［＝artisans］themselves, *thought* predominates over *action*.（*Civic* 69）（下線部引用者）

文明が発達した都市に人口が集中することで，これまでにない「知的労働者」が登場する。知的労働は椅子に座って労働する「学者」（“the class of sedentary *Literati*”［*Atmosphere* 60］）だけのものではないし，いわゆる「知的労働者」（例えば，会計事務所員や銀行員など）に限定されるものでもなくなった。（*Civic* 36）「都市生活」（“civil life”）のなかでは労働者のほとんどが知的労働を強いられる。機械工であれ熟練工であれ小売り商人であれ，程度の差はあるが知的労働・活動が「常態化」し身体活動は脳を休める一時の余暇となった。（*Atmosphere* 60）ジョンソンは非常に面白い例をあげている。「女々しい婦人帽製造販売員の男」（“semi-feminine man-milliner”［*Civic* 69］）の例である。彼はリボンや帽子やレースを手作業で作るが，その業績は店頭での製品の売り上げにかかっている。ならば彼の成功は「筋肉の素早い動きよりもむしろ口先のうまさ（＝口達者なこと）」（“the volubility of his tongue”［ibid.］）にかかっているはずだ。現代のいわゆる接客業の登場であり，彼らが使う，いや使わざるを得ないのは筋肉ではなく頭脳なのだ。ジョンソンの胃弱論ひいては疾病論の根幹にこの知的労働の肥大化が潜んでいる。（See also *Change* 14）

ジョンソンの目には「自由と繁栄の国」（*Morbid* 85）イギリスの人々こそが，どの国にもまして「知的活動の高いエネルギー」（*Atmosphere* 69）を持っているように映った。しかし，それは同時に「精神的動揺」（“Mental Agitation”［*Atmosphere* 69］）や「心的狼狽」（“mental perturbation”［*Civic* 35］）などと様々に呼ばれる心的負荷を人々に押し付けることにもつながる。「都市の生活の心的不安」が心身に与える影響がいかに大きいかは，

草笛を吹く牛引きの少年の頭脳と計算高い株式仲買人の頭脳を比べてみればすぐ分かる。（*Civic* 34）人口が都市に集中し文明化が加速し，知的労働の幅が広がれば広がるほど，「心的感情」（“Mental Emotions”［*Civic* 34］）が不安や心配，懸念や危惧，心の動揺に捕捉される幅も広がる。こうした心の動揺，心的不安が心身の健康一般に与える影響は大きい。特に，脳と胃が強力な共感関係で結びついていることを考えれば，消化器系統への影響は火を見るよりも明らかだ。（*Atmosphere* 69–70）ジョンソンの胃弱論に他の「胃の医師」には見られない特異な点があるとすれば，異常なまでの「心的感情」の重視である。確かに，心的感情が体の健康へ与える影響は，「情念」というジャンルの中で古くから医師たちの間で議論されてきた。しかしジョンソンにあっては「心的感情」とその動揺の扱いは抜きんでている。都市生活において「知的活動」が「肉体活動」を凌駕したのに呼応して，胃弱の心的要因が身体的要因を圧倒する。それがよく分かるのは，『胃腸の病的感受性』における胃弱の病因論においてである。ジョンソンは初めに胃弱を引き起こす多数の物理的・身体的要因――大気の影響や食事など――をくどくどと並べ立てる。（*Morbid* 73–76）ところがその直後の「心的要因」に進むと，驚くことにこれまでの説明を帳消しにしてしまう。「物理的要因は多数存在するかもしれないが，その効果は，精神の不安や苦労（“anxiety or tribulation of mind”）の効果に比べると，全くもって取るに足らない。」（*Morbid* 78）シティのレイデンホール街の企業の経営者からコヴェント・ガーデンのジャガイモ商人に至るまでこの国の人々は「投機のリスク」に日々怯え，心休まるところを知らない。（ibid.）暴飲暴食や不摂生という身体的要因を考慮することなく，精神の安定を揺さぶるこうした心的要因のみで胃弱がなぜこの国で流行するのかを説明できるのである。（*Atmosphere* 70）[11]

このように，「都市生活」を送る摂政時代の人々は知的活動――それは後に頭脳労働（brain labour）と呼ばれるようになるだろう――に勤しむ

時間が質・量の両面において飛躍的に変容し，それに伴い，精神の安定の不断の動揺を経験することで「胃腸の神経が病的な」状態と化し，胃と全身を結ぶ強力な共感が媒介となって，「胃弱」と呼びうる様々な疾病の様態を心身全体にもたらすことになる。そう，摂政時代に明確になるのは，胃弱が暴飲暴食によってもたらされる胃の病というよりも，むしろ，知的活動と心的動揺によってもたらされる頭の病だということだ。ジョンソンはある所で，この事態を「胃の頭脳化」（“the stomach…*intellectualized*”［*Economy* 126］）と呼んでいる。更に言えば，胃弱は，暴飲暴食を可能にする財力を持った富裕層の貴族が，その地位を確認するための18世紀的な文明の病――痛風や神経症なども「腹の病」であった――ではなく，むしろ，そうした財や富を獲得しようと必死にもがき知的労働をしたあげくの結果としてある。それは，当の労働者に支払われる報酬であると同時に彼らが支払わらなければならない高い税金なのだ。

以上，ここまでジョンソンの胃弱論の特性を見てきた。都市生活を送る知的労働者の「頭の病」がジョンソンの胃弱だった。ジョンソンはモダンな生活様式やモダニティという用語を使う時代に生きていないし，頭脳労働や過労，ストレスといったモダニティに特有になる言葉も利用できない。ただ，「都市生活」（civic life）という語はほぼ「モダンな生活」と同義で使われている。としても，まだ彼の胃弱論にモダニティのざわめきは十分に聞こえてこない。それを聞き取るためには「変幻自在な病」の別様体，“Wear and Tear”の病を見る必要がある。

2．“Wear and Tear”――「胃弱の時間」とモダニティ

“Wear and Tear”の病

ジョンソンは1831年に刊行された『転地論』を回顧から始めている。30年前に「現代のバビロン」であるロンドンに上京したジョンソンは野心と

希望とで満ち溢れていた。ところが都市の群衆の渦に巻き込まれ野望は挫かれる。(*Change* 2)「競争という渦に飛び込む」(*Change* 2) 都市の人々同様，ジョンソンは挫折と疲弊を感じる。この回顧録を前振りとして“Wear and Tear”のセクションが始まる。経験と観察を重んじるジョンソンが自分の病の経験を語り著作に積極的に反映させ，権威付けの一種として利用するのは，『病的感受性』でも同様だ。ジョンソンはロンドンに上京してから，がむしゃらに働き――勤勉と几帳面さが彼のモットーだ――過労がたたって胃弱になる。(“Sketch” 40)『転地論』での回想はその体験を“Wear and Tear”の観点から語り直していることになる。ということは，“Wear and Tear”の病は名指しこそされないが，胃弱のことを指しているのが分かる。ではこの“Wear and Tear”(=「摩耗・擦り減り」) の病とはいかなるものか？(本論では“Wear and Tear”を訳さずそのまま使用する。)

ジョンソンは胃弱を「病的な気質」と呼んだように，“Wear and Tear”も「病と健康との中間地点にあるが，後者よりは前者にずっと近い心身の状態」(*Change* 2) と漠然と定義する。それは，誰もが感じてはいるがまだ名前を持たない病であり，都市を見渡せばあちらこちらにすぐ見つけることができる病である。それは肉体労働ではなく過度の知的労働の結果であり，つまりは，都市生活者特有の病ということになる。(*Change* 2–3) この“WEAR and TEAR COMPLAINT”はイングランドに固有のもので恐らく「英国の病」(“English Malady”) の末裔である。(*Change* 4) (英国の病とは18世紀にファッショナブルな神経医ジョージ・チェインが流通させた言葉で，文明の発展がもたらす「神経の病」の総称――憂鬱症，神経症，ヒステリー，痛風など――を指す)。18世紀の「英国の病」は贅沢や怠惰の病――暴飲暴食，不摂生からくる疾病――だったが，摂政時代の「英国の病」は勤勉と過労，知的活動から生じる病だ。(4) ジョンソンは文明病の逆説――病を作る原因が豊かさと便利さをもたらす――に意識的だ。「実際，Wear and Tear の病をもたらしたまさにその原因，すなわち，勤

勉，いやむしろやり過ぎが……家の家具をよりよいものにし……機械をより効率よく働かせ，商人をずっと豊かにするのだ」。（*Change* 4）この病がパリよりもロンドンで蔓延っている理由をジョンソンはウィットに富んだ言葉でこう言う。「ロンドンでは仕事（“business”）が唯一の楽しみで，パリでは楽しみが唯一の仕事なのだから」（4）と。これらすべては胃弱の病理と同一と言っていい。では，なぜわざわざジョンソンは胃弱を“Wear and Tear”の病と言い換えたのか？実はここにこそジョンソンの胃弱のモダニティが隠されている。

摩擦の系譜学――小史[12]

ジョンソンがここで「摩擦・摩耗」を意味する“Wear and Tear”をある慢性的心身の病的状態――現代なら疲弊と呼びうるもの――として捉えているのは，かなり新しい。恐らくこれが最初期の例の一つである。この言葉から思い浮かべられるのは，例えば靴やＴシャツが何年も時間をかけて使い古され「ズタボロ」になった様だろう。この言葉が人間に適用されると心身の消耗・消尽（＝疲弊）を意味することになる。しかし，歴史的に見てこの言葉が19世紀以前にこの意味で使われることはほとんどない。この“wear and tear”が病理化され医学言説の中で流通しだすのは19世紀中半になってからである[13]。ECCO を検索しても，“wear and tear”は，労働で使用する道具や消耗品，具体的には，馬車や馬，船とその用具，農具一般，食器類に対して，その摩滅損耗ないしは損失分を意味する言葉として主に使われているのが分かる。（Jacob 60, 92; Smith 28, 68, 75）但し人間に使われる場合もあるが，それは道具として使われる奴隷や使用人である。（Smith 122）だからジョンソンがこの言葉を人間の心身に適用する時，理解の助けになるように字義通りの（本来の）意味を類比として使ったのも肯ける。「この状態は船のある状態と比較できるだろう。その船はまだ航海することはできるが，荒波の影響を受けて緩んだ船板の合わせ目

を叩いて締め直す必要がある。」（*Change* 3）比喩的意味を理解させるのに字義的意味を比喩として使うこの場面はまさに“wear and tear”が字義と比喩の転換を果たしている瞬間をとらえている。

ここで立ち止まって考えなければならないのは，なぜ18世紀に“wear and tear”（＝「摩耗・摩擦」）が人体に適用されなかったかだ。18世紀の医学は身体を機械と見立てたではないか？　ならば容易に適用されるはずだと。その答えは，第一に啓蒙期医学が身体を時計のように歯車で成り立つ「機械」と見なしてはいないから（機械論的な見方をしただけ）であり，第二に（こちらがより重要だが），摩擦は18世紀のファイバー・神経医学体系において「振動の生理学」の一部をなしており，心身の健全状態を保つのに必須であったからだ。この点は私の著書（*Fiber*）に詳しいのでそちらを参照していただきたいが，例えば18世紀前半のファイバー医療機械論における消化作用は，体を張り巡るファイバーの絶え間ない「揺れと振動と衝突」（Ishizuka *Fiber* 71）によって引き起こされる。その運動によって粗い物質が細かく砕かれ，段階的に洗練されたものになり，ある地点で体の栄養素になり，最終地点では「動物精気」を作ることになる。摩擦＝振動によって粗いものが洗練されていくという考えは医学に限ったものではない。例えば，チェインは医学を超えた神秘的な身体哲学にも適用する。チェインにとって霊魂は霊的肉体という乗り物に乗ってこの世に運ばれてくるが，その時，霊魂に粗い物質が覆いかぶさる。この世の「苦痛，罰そして苦悩」はその粗い物質を削り落とすためにむしろ必要なことだ。チェインはこう言う。「堅い物質を互いに擦りつけることがそれらを洗練させ磨き上げる唯一の方法である。そして，**摩擦**がより強く長ければそれだけ，その磨き上げはより洗練されたものになる」（“A scrubbing hard Bodies against one another, is the only Method to *polish* and *finish* them; and the harder and longer the *Friction*, the finer the Polish”［25］）。摩擦によって洗練されるという考えは，より大きな観点からすると，18世紀の「洗練さ

れた・上品な社会」（polite society）の一部である。18世紀文化のキーワードである「上品さ」（politeness）はラテン語の *politus*（＝polished）に由来する。シャフツベリー卿の度々引用される以下の文章は，「摩擦」が18世紀の洗練された社会を作り上げる必須条件だという点を見事に言い当てている。「私たちは互いに互いを磨き上げる。いわば仲睦ましく衝突することで，粗削りなところや野暮ったい性格を擦り落とすのだ。」（“We polish one another, and rub off our Corners and rough Sides by a sort of *amicable Collision*.”［64］）ここまでくれば18世紀では，摩擦（friction）が摩耗＝疲弊（wear and tear）の代わりになりえないこと，病理化されていないこと，それどころか個人と社会との健康に必須なものであったことが分かる[14]。

ここでジョンソンの“Wear and Tear”論に戻ろう。回顧の場面でジョンソンは都市の群衆の荒波を「摩擦を起こす」（“chafing”［２］）ものと形容している。ジョンソンはその荒波に飲み込まれ（いや摩擦され）疲弊の病を患う。ジョンソンの都市は，18世紀の社交界やクラブのような肩と肩とが触れ合い（＝摩擦し合い），議論し合い——discussion とは言葉を揺さぶって粉々にすること，摩擦し合うことだ（cf. Wiltshire 78, 162）——お互いを洗練させる場とは違って，人を疎外する空間だ。実はジョンソンの胃弱の病理論の底にこの「摩擦」のイメージが漂っている。先に，胃弱の圧倒的心的要因を述べたときに「精神の不安や苦労」（“anxiety or tribulation of mind”［*Morbid* 78］）という言葉をあげたが，ジョンソンはこの“tribulation”という語を他でも度々使用する。（*Economy* 89, 93; *Change* 15）個々人の苦労，悩み事，困苦を意味するこの tribulation は語源的にはラテン語の *tribulare* に由来し，その名詞形 *tribulim* は脱穀用具を意味する（*tri* = to rub 擦る＋*bulum* = 道具を意味する接尾辞）。つまり，心的苦労というこの言葉にも摩擦のイメージが潜んでいる。これは偶然ではない。というのも，あるところでジョンソンは胃弱をプロテウス的「怪物の病」

（*Economy* 122）と言い換えて，それが椅子に座った生活習慣や身体の劣化と心的狼狽，興奮や消耗が生み出したものと言った後に，この病は「もしこういう言い方をしてもよいなら，精神が物質に物質が精神に**擦り合うこと**」（“the *friction*　（if I am allowed such a term）of mind on matter, and of matter on mind!”［*Economy* 122］）によって生まれたものと言っているからだ。“Wear and Tear”の病はジョンソンの胃弱の原理を下支えする「摩擦」の病理の表現型と言えるだろう。

もう少し先に進もう。18世紀の摩擦から19世紀の摩耗＝疲弊への飛躍に何が必要か？　同じことを別の言い方で表現すれば，摩擦の，モノから人への転換に何が必要なのか？　例えば奴隷について考えてみよう。18世紀でも“wear and tear”は奴隷の人体に適用はされた。しかし，それはいくらでも代理可能な消耗品としての人だ。その時「人」はものと同じなので「時間」を生きてはいない，ただ空間にあるのみだ。奴隷には失礼だが摩耗はするが「疲弊」はしない。摩擦が摩耗＝疲弊と同列に置かれるには，つまり，摩擦が病理化されるには，まさにこの「時間」が組み込まれる必要がある。私はこの「時間」を19世紀の社会に導入したのは（少なくともその一因となったのは）胃弱ではないかと考える。どういうことか？

「胃弱の時間」とスピード――弱い情念の強さ

胃弱はのろい。とにかくのろい。胃弱が慢性病（chronic diseases）の総体のような存在であったことを考えれば，胃弱に「時間性」（chronicity）が内在しているのは不思議ではない。熱病やコレラなど急に起こって急に終わる――治る場合もあれば死ぬ場合もある――急性疾患とは違い，何日も何日も時間をかけてこっそりとやって来る。ただ，19世紀の胃弱は急性疾患との対比においてのろいだけではない。とにかくのろいのだ。まず，日単位の時間ではない。年単位の時間である。子供や若造は胃弱に罹らない，というか罹っていたとしても気づかない。健康で元気である。医師に

よって具体的な年齢は異なるが，おおよそ中高年が罹る病として胃弱は想定されている。ジョンソンはおよそ30代から40代に発症する病と見ている。（*Economy* 89–121; see also Philip, 271）その進行は随分ゆっくりで本人には全く感じられない。気づいた時には胃弱の変幻自在な症状が襲い掛かる。18世紀の痛風が老人の病（しかも圧倒的に男性老人）とされていたのに対して（Porter and Rousseau），19世紀の胃弱は中高年の男性の病であり，痛風が贅沢のできる貴族階級の病であるのに対して胃弱は頭脳労働を強いられる知的中産階級の病と言うことができるだろう。

胃弱はのろいだけではない。グズグズである。治ったとしてもそれは一時的なものでしかなく，周期的にあるいは非定期的に襲いかかる。そのグズグズさは，19世紀に注目を浴びた「病弱者」（valetudinarian）や「回復期」（convalescence）の患者を思わせる。どちらも中途半端な状態を生きて，病の方に転がるか回復の方に転がるか天に任せるしかない[15]。胃弱に罹ったら罹ったで，その対処にのろい時間が費やされる。患者は一人の医師や薬剤師に飽き足らず，別の医師に相談しては希望を与えられ，そして悲観しまた別の医師へと足を運ぶ，ということを繰り返す。19世紀には水治療や鉱泉療法，身体運動，遠方への健康旅行，それができなければ時間をかけた散歩——もちろん毎日の食養生は欠かせない——などいくらでも胃弱者をグズグズされるアイテムが揃っていた。例えばジョンソンはお金に余裕のある胃弱者に長旅を勧める。身体的効用ももちろんあるが，目の前を流れる風景に目をやれば，過去を内省したり将来を思い悩んだりするのを忘れるので精神も安定するのだ。（*Morbid* 117–118）[16]

胃弱ののろのろ，グズグズとした時間は，それが致死的な病ではなく，むしろ人を長生きさせる病であるという点にも現れている。コレラは人をあっという間に死に至らしめる恐ろしい疫病であるが，胃弱は人に長寿とほどほどの健康——あるいはほどほどの不健康と言った方がいいか——を与える。（この点については以前カーライルの胃弱論で論じた。［石塚］）

ただ，ジョンソンを含め初期の「胃の医師」たちにとってはこの「事実」はまだ確かな経験とは言えず，明確に言語化はされていない。

私はこの胃弱ののろのろ，グズグズした時間を「胃弱の時間」と呼びたい。この時間に対比されるのは，言うまでもなくモダニティの時間「スピード」である。モダニティを特徴づける代表的な概念の一つに「スピード」が，そして，モダニティの経験を特徴づけるのがスピードによる衝撃（ショック）であることは多くの研究者が指摘するところだ。（Daly; Houghton 6−8; Schnapp; カーン 5 章「速度」）例えば，度々引用される19世紀の文筆家 W・R・グレッグの「ハイプレッシャー生活」（“Life at High Pressure”）からの一節を引いておこう。「疑うべくなく19世紀後半の最も顕著な生活の特徴は，そのスピードにある」。（263）電信，通信，鉄道，蒸気機関の飛躍的発達によって人々は加速化した社会を生きる。と同時に時間に過敏になる。時間通りにやって来る列車に乗り遅れないようにと時間を気にするビジネスマンは「日々，疲弊」（“a daily wear and tear”［267］）を感じざるを得ない。そう言えば，『不思議の国のアリス』の「兎」も遅刻してはいけないと，懐中時計を取り出し時刻を確かめていたのだった。時計が精確になることで神経過敏な人は時計を見るたびに脈拍が速くなる。（カーン 19）アーノルドの「病的な忙しなさ」が支配する世界だ。但し，このスピード革命が――引いてはスピードに酔いしれるモダニティが――いつ始まったのかについては議論の余地がある。19世紀後半から20世紀初頭にかけてという見解が一般的だが，19世紀始めにこの革命を持ってくる見方もある。（Schnapp）この議論に深入りすることはここでは避けるが，摂政時代に胃弱の流行と共に「胃弱の時間」が導入されたとすれば，19世紀初頭説に肩入れしたい。以下に明らかになるように「胃弱の時間」はモダニティのスピードに欠かせないものだからだ。

ここで留意しなければならないのは，「胃弱の時間」はモダニティの「スピード」の外部に対置されるものではないということだ。それは，例えば

忙しない都市と対立される田舎でのゆったりと流れる悠久な時間のことではないし，前近代の自然のリズムに沿った健康的に流れ行く時間ではない。モダニティと並行して流れる時間，モダニティの中でしか流れない時間，モダニティに対抗するのではなくそれを陰で支えさえする時間だ。どういうことか？

ここで，ジョンソンの胃弱論に戻ろう。ジョンソンは変幻自在なプロメテウス的病の胃弱を「ズタボロの病」（“Wear and Tear malady”）と呼び直した。それは胃弱の根幹に時間性があることを物語る。ズタボロになるには摩擦と時間をかけた日々の（持続的な）使用が必要だ。先にジョンソンの胃弱論の核に摩擦のイメージがあることを見たが，ここでそれを敷衍しよう。鍵となるのは弱い情念の強さである。

ジョンソンは都市生活者の心的状態を記述するのに古典的な「情念論」に頼る。胃弱を発症する年代が遅いのは，若い年代に特有の情念である「模倣」からその年代に特有の情念「野心」（“Ambition”）に変わる必要があったからだ。（*Economy* 82ff）　ジョンソンは「野心」を「支配的な情念」（“the ruling passion” 83）とみなし，他の情念――例えば競争心，羨み，妬み，名誉欲，見栄，誇りなど――を生み出す親玉とみなす。そうした諸々の情念・感情は野心の偽装した姿（83）であって，ジョンソンはそれを都市生活の諸悪の根源とみなしている。今や誰もが野心家だ。ボンドストリートの肉屋の妻や娘でさえも隣近所の妻や娘よりも自分をよく見せたいと思っている。（131）誰もが今の自分の地位にとどまることに満足できない。人口増加によって生存競争を余儀なくされた都市生活者は「心的エネルギー」を活発に働かせ（90–91），結果，「プロメテウス的病」胃弱の餌食になる。（131）とここまでは，疾病は自分自身の野心から生まれた産物（いうなれば身から出た錆）という古典的情念疾病論の枠組みにあるように見える。しかしジョンソンはそのすぐ後で，胃弱は自分が招いたものだが，現代の文明社会にあっては「自分では避けることができない」要因が数えきれな

いほどあると言う。(131) 具体的な例としてジョンソンがあげるのは,「家族の面倒」(“cares of families”) である。家族を食わせていけるか心配し,子供たちの我がままに手を焼いたりと,「自分自身の誤った行いとは全く無関係に侵入してくる何千もの不安」(131)がのしかかる。体系的には語っていないが,どうやらジョンソンは,大枠としての情念(＝野心や競争心)とそれに由来する心的労働の過剰（＝エネルギーの蕩尽）のみでは胃弱の病因には足りないと考えているようだ。何かが足りない,欠けている。胃弱の病因論を完成させる最後のピースは「弱い情念」である。ただ,ジョンソンは十分にこのことを言語化できていない。自分の行為の外側にあるが,自分の心的領域に勝手に侵入する自分の心や感情,不安や心配や懸念,といった漠然とした表現でしか伝えることができない。しかし,この弱い情念にこそ摩擦と「胃弱の時間」が絡んでいる。

“Wear and Tear”の病を論じる途中でジョンソンは,その目に見える明らかな徴として「倦んだ顔」(“Care-worn countenance”［*Change* 8］) を取り上げる。その際にジョンソンは強い情念よりも弱い受け身的な情念（感情）の方が顔に「懸念・心配」(care) を刻むのだと言う。怒りや憎悪,嫉妬や復讐心のような「より荒く激しい情念」は,激しいとはいえ一時的なものなので容易に隠せるし,心身にもさほど影響はない。反対に,「不安,そして**懸念**の様々な形」(“anxiety, and the various forms of CARE”［8］) からなる「ずっと弱い,受動的な情念」(“the more feeble and passive emotions of the soul”［8］) はそうはいかない。都市生活から来るこうした弱い情念こそが心に深く沈み込み,そのエネルギーを枯渇させ,顔にその徴を焼き付けるのだ。(ibid.) 激情型の情念よりも受動的な（とは自分では避けることができない）感情・情念の方が力が強い。ジョンソンはこの弱い情念の強さを説明するのに,摩擦のイメージに頼る。

The tornado, and the cataract from the clouds, were not such deep furrows in the

mountain’s rocky side, as the faintly murmuring rill, whose imperceptible but perpetual attrition effectuates more in the end, than the impetuous but transitory rush of the roaring torrent engendered by the storm, not fed by the spring.（*Change* 8）（下線は引用者）

強い情念に比される大暴風雨は岩山に深い溝を作れないだろう。そうできるのは弱くさらさらと流れる小川の方だ。というのも，感じられないかもしれないが細流は不断に岩肌を「摩擦する」（“attrition”）ことで結局は深い溝を作るのだから。「摩擦・摩耗」を意味する“attrition”が使われたのは偶然ではない。細流（弱い情念）はコツコツと継続して摩擦を与える。一つ一つの摩擦は小さく弱いが，それが数億回にも及べばいつの間にか分厚い壁に穴を穿つように，対象をより深く強く摩耗させるだろう。確かに時間はかかる。のろのろとした，グズグズとした時間だ。その効果は蓄積されるが，相手（対象）はそのことに気づきもしない。この「摩擦・摩耗」の時間性はまさに「胃弱の時間」そのものだ。19世紀の最初の四半世紀に胃弱が流行したことと摩擦・摩耗に時間性が組み込まれたのは偶然ではない。では「胃弱の時間」（＝摩擦の時間）とモダニティのスピードはいかなる関係にあるのか？　その二つをつなぐ輪はショックである。

ショックのモダニティ——「破局」と「失敗」

ヴァルター・ベンヤミンのボードレール論（「ボードレールにおけるいくつかのモチーフについて」）以来，モダニティを特徴づける経験は「ショック」（shock）だという考えは広く研究者の間で共有されてきた。（Bonea; Daly; Schnapp）ベンヤミンはショックのモダニティを説明するのにフロイトから「刺激保護」ないしは「刺激防御」の理論を援用する。都市生活者はかつて経験したことのない感覚刺激を受けながら生きているが，外界からの過剰な刺激（＝ショック）に対応するために，「意識」は盾や保護

膜となるような機能を発達させる。端的に言えば，新しい刺激が意識の新しい表皮層を作り替え，心の保護・防御となるということだ。例えば，鉄道の速度は，これまで馬車の速度しか知らなかった人をいらつかせ，不安にさせるだろう。しかし次第にその不安（anxiety，nervousness）は意識に同化し，意識の表皮をいわば分厚くする，あるいは改変する。そうして列車に揺られながら読書することも平気になるだろう。(シュヴェルブシュ10章）これが刺激保護・防御である。このように人は「不安」や「苛々」によってモダンな新しい刺激に身を慣らしていく。不安はいわば繭となって主体を守るのだから，それはトラウマ的衝撃（＝破局）に対する防御といえる。簡略化すればベンヤミンの言うショックのモダニティ論はこうなろう。

このショックのモダニティ論を受けて私は大胆なテーゼを提示したい。モダンな都市生活者は「不安」でモダニティのショックを受け止めたが，「不安」を「胃弱」と読みかえることも可能なのではないか。特に精神と身体とが有機的に一体であった時代にあってはそう言えるのではないか。考えてみると，胃弱であることの大きな利点の一つは「破局」に陥らないことだ。変幻自在な胃弱は，確かに症状が進行すれば，重度の憂鬱症に変貌し，精神の崩壊をもたらすかもしれない。しかし，彼らが「胃弱」である限り，そして適度にゆるゆるとした養生をする限り，最悪の破局（例えば自死）は免れる。いうなれば，胃弱者は，不安でショックを受け止め，意識の膜を作る代わりに，胃でショックを受け止め胃に防御の膜を作ったのだ。ジョンソンの時代はまだ鉄道や通信による衝撃は感じられなかったものの，弱い情念によるジクジクとした摩擦を胃で受け止め，胃弱を発症させた。胃弱は疾病である限りにおいて，そしてズルズルといつまでたっても治癒できないという意味で明らかに「失敗」である。毎年毎年，毎月のように胃弱の研究書や論文が発刊されるとうんざりしながらも書かれ続ける胃弱の言説はまさに「胃の医師」たちの大いなる「失敗」の記録だ。

だが，この「失敗」は少なくとも「破局」に対しては「成功」と言えるのだ。例えば，知的労働者の過労によるバーン・アウトは「破局」の典型だが，胃弱という「失敗」はそれを救ってくれるだろう。癇癪が狂気へと走らずにいるには胃弱による不機嫌な日々を送ればいい。（“Bilious”は胃弱であると同時に不機嫌を意味する19世紀のバズワードである。）この仮説が正しいとするなら，「胃弱の時間」とモダニティのスピードとの関係を見通すことができる。すなわち，「胃弱の時間」はモダニティのスピードが孕む「破局」の回避，その防御として機能する。だから，「胃弱の時間」はモダニティの対極を流れるのではなく（それと敵対するのではなく），傍らでその「安全」を支えるのだ。この意味で胃弱はモダニティの産物でありながら，その暴走を抑止する不愉快な緩衝材とも言えるのだ[17]。

以上，ジェイムズ・ジョンソンの胃弱論，特に Wear and Tear の病としての胃弱に焦点を当て，彼の胃弱論の根底に摩擦という考えがあること，そこには時間性が関わり，「胃弱の時間」と「摩耗の時間」が同時期に歴史の表舞台に現れたこと，モダニティを特徴づける「スピード」に胃弱の時間性が住みついていることを述べた。最後に「学者ジプシー」に帰って本論を終えよう。詩人は「モダンな生活の奇妙な病」を前にした「学者ジプシー」に警告を与える。「逃げろ」と。「我々の道から，熱病の接触から逃げろ！」（213）それだけ「心的奮闘」（“mental strife”）の感染力は強いのだからと。的確な忠告だ。というのも，200年も前の時代からいわばタイムトラベルしてやって来た「学者ジプシー」が，モダンな生活様式とそれが持たらすショックへの耐性を持っていないのは明らかだからだ。彼はチェインの英国の病も知らないだろう。そんな彼が「モダンな生活の病」に感染したらどうなるか。「失敗」することなく「破局」を迎えるに違いない。だから詩人は彼に逃げろと忠告しているのだ。だが，胃弱の経験を持つものは違う。彼らは分かっている。19世紀の心身を疲弊させるモダンな都市生活を生き抜くには，それに耐え得るだけの「弱い」胃を持たなけ

ればならないということを。ズタボロ（“Wear and Tear”）になりながらズルズルとした（不）健全な生活をやめられない胃弱者は，案外そんな生活に嫌気を覚えながらも，内心安堵の溜息をついているのかもしれない。

註

1　本論文は令和３年度長期在外研究員（研究課題「長い19世紀における「胃弱」の歴史」）の研究成果である。

2　近年，「疲弊」（fatigue）の歴史への関心が高まっている（Shaffner; Vigarello）。

3　目覚まし時計の導入は1876年ごろとされる（Shuttleworth 17）。

4　医学雑誌で過労と疲弊がテーマとして議論されるようになったのは1870年代後半以降である。19世紀末から20世紀初頭の文学と「疲弊・消耗」については Greaney を見よ。彼もこの時代を「疲弊の黄金時代」と見ている。（238）

5　疲弊の医学化については Blayne を見よ。

6　熱帯医学の先駆者としてのジョンソンについては Harrison を見よ。

7　その点については Gibbs，石塚，Ishizuka（Carlyle）も見よ。

8　注意したいのは，時代によって何を症状とみるか疾病とみるかは異なるということだ。熱（fever）は現代では熱が出るという症状だが，20世紀以前にあっては「熱病」という壮大な疾病体系が存在していた。

9　「痛風診断」については Porter and Rousseau を見よ。

10　詳述は避けるが，この場合，心身の不調は胃腸の神経に起因するにもかかわらず，胃の病（消化不良）を生じさせることも，胃に痛みや不快を感じさせることもない。（*Morbid* 49）

11　厳密にはここでは「胆汁症」についてジョンソンは述べている。

12　疲弊を摩擦の観点から見た歴史は管見の及ぶ限りない。

13　早い例が G. T. Hayden, *An Essay on the Wear and Tear of Human Life*（Dublin, 1856）。

14　摩擦（friction）の医療的効用は19世紀になっても見られる。例えば電気マッサージや乾布摩擦，乗馬など。その意味で摩擦は病理的なものと医療的効用が認められるものに分化する。

15　19世紀の回復期の患者については Krienke に詳しい。Krienke は回復期の患者の時間性を重視している。その時間性は胃弱の時間にも相通じるものがある。

16　本論では触れなかったが，実はジョンソンの著作の大分を占めるのは，胃弱よりも「旅行」である。それは文字通りの旅行――ジョンソンは旅が大好きだ――の場合もあるが，胃弱の治療としての旅の場合が多い。現代の感覚からすればジョンソンの旅行記は退屈極まりないが，胃弱論の方こそが読者を「旅」に誘うための大きな前振り

ともいえる。

17　更に大胆な仮説を付け加えれば，胃弱の防御機能が低下するに比例して「不安」の防御機能が高まる。ビアードの神経衰弱からフロイトに至る道は胃弱の凋落の時代であったのは偶然ではない。

参考文献

Allbutt, T. Clifford. “Nervous Diseases and Modern Life.” *Contemporary Review* 67 (1895): 210–31.

—— *On Visceral Neuroses* (London, 1884).

Arnold, Matthew. *Poems* (London, 1853).

ヴァルター・ベンヤミン『パリ論／ボードレール論集成』浅井健二郎編訳（ちくま学芸文庫，2015年）。

Blayne, Steffan. “‘Drooping with the Century’: Fatigue and the *Fin de Siècle*.” In *Progress and Pathology*.

Bonea, Amelia, Melissa Dickson, Sally Shuttleworth, and Jennifer Wallis, *Anxious Times: Medicine and Modernity in Nineteenth-Century Britain* (U of Pittsburgh P, 2019).

Cheyne, Goerge. *An Essay on Regimen* (London, 1740).

Daly, Nickolas. “Railway Novels: Sensation Fiction and the Modernization of the Senses.” *ELH* 66 (1999): 461–87.

Dickson, Melissa, Emilie Taylor-Brown, Sally Shuttleworth eds. *Progress and Pathology: Medicine and Culture in the Nineteenth Century* (Manchester UP, 2020).

Gibbs, Dennis. “The Demon of Dyspepsia: Some Nineenth-Century Perceptions of Disordered Digestion.” In W.F. Bynum ed., *Gastroenterology in Britain: Historical Essays* (Wellcome Institute, 1997).

Greaney, Michael. “Literary Exhaustion.” In Sighard Neckel, Anna Katharina Schaffner, Greta Wagner eds., *Burnout, Fatigue, Exhaustion: An Interdisciplinary Perspective on a Modern Affliction* (Palgrave, 2017).

Greg, W.R. “Life at High Pressure.” In Greg, *Literary and Social Judgments* vol. 2 (London, 1877).

Habershon, S.O. *On Diseases of the Stomach the Varieties of Dyspepsia* (London, 1866).

Harrison, Mark. “Tropical Medicine in Nineteenth-Century India.” *BJHS* 29 (1992): 299–318.

Houghton, Walter E. *The Victorian Frame of Mind, 1830–1870* (Yale UP, 1957).

Ishizuka, Hisao. “Carlye’s Nervous Dyspepsia: Nervousness, Indigestion and the Experience of Modernity in Nineteenth-Century Britain.” In Larura Salisbury and Andrea Shail eds., *Neurology and Modernity: A Cultural History of Nervous Systems, 1800–1950* (Palgrave, 2010).

—— *Fiber, Medicine and Culture in British Enlightenment*（Palgrave, 2016）.

—— “From Hypo to Bile: The Rise and Progress of Biliousness in the Long Eighteenth Century.” In Clark Lawlor ed., *Literature and Medicine: Vol. 1. The Eighteenth Century*.（Cambridge UP, 2021）.

石塚久郎「バイオグラフィア・ディスペプシア——カーライルの身体と「胃弱」の発見」鈴木晃仁・石塚久郎編『食餌の技法——身体医文化論 IV』（慶應義塾大学出版会，2005年）。

Jacob, J. *Observations on the Structure and Draught of Wheel-Carriages*（London, 1773）.

Johnson, James. *Change of Air, or the Philosophy of Traveling*（London, 1831）.

—— *The Economy of Health or the Stream of Human Life*（London, 1836）.

—— *An Essay on Morbid Sensibility of the Stomach and Bowels*（London, 1827）.

—— *The Influence of an Atmosphere*（London, 1818）.

—— *The Influence of Civic Life*（London, 1818）.

スティーヴン・カーン『時間の文化史』浅野敏夫訳（法政大学出版局，1993年）。

Krienke, Hosanna. *Convalescence in the Nineteenth-Century Novel: The Afterlife of Victorian Illness*（Cambridge UP, 2021）.

Philip, A.P. Wilson. *A Treatise on Indigestion and its Consequences*（London, 1824）.

Porter, Roy and G.S. Rousseau. *Gout: The Patrician Malady*（Yale UP, 1998）. ロイ・ポーター，G･S･ルソー『痛風の文化史』石塚久郎監訳　青柳伸子訳（作品社，2023年）。

Richardson, Benjamin W. *Diseases of Modern Life*（London, 1876）

ヴォルフガング・シヴェルブシュ『鉄道旅行の歴史』　加藤二郎訳（法政大学出版局，1982年）。

Schaffner, Anna Katharina. *Exhaustion: A History*（Columbia UP, 2016）.

Schnapp, Jeffrey T. “Crash（Speed as Engine of Individuation）.” *Modernism/Modernity* 6（1999）: 1–49.

Shaftesbury, Lord. *Characteristicks of Men, Manners, Opinions, Times* vol.1（London, 1711）.

Shuttleworth, Sally. “Fagged Out: Overwork and Sleeplessness in Victorian Professional Life.” *Interface Focus*. 10.3（2020）: 20190088.

“A Sketch of the Life, and Some Account of the Works, of the Late Dr. James Johnson.” *Medico-Chirurgical Review* n.s.3（January 1846）: 1–48.

Smith, Adam. *An Inquiry into the Nature and Causes of Wealth of Nations* vol. 1（London, 1789）.

Vigarello, Georges. *A History of Fatigue: From the Middle Ages to the Present*（Polity, 2023）.

Wiltshire, John. *Samuel Johnson in the Medical World: The Doctor and the Patient*（Cambridge UP, 1991）.